紫式部の物語の方法

――継父母・継子の関係を中心にして――

小沢恵右

(一)

源氏が紫上の養女となっている明石姫君を養育するにあたって、「螢」の巻に

継母の、腹ぎたなきむかし物語もおほかるを「心見えに、心づきなし」とおぼせば、いみじくえりつゝなむ書きとゝのへさせ、繪などにも書かせ給ひける。

※〈古典文学大系㈡四三六5～7〉

という記述がある。源氏が明石姫君を養育する時に、昔物語〈源氏物語以前の物語〉の中には、〈継母の腹ぎたなき〉ものが多いので注意をして物語を与えたということである。これによると昔物語の中には、〈継母の腹ぎたなき物語〉つまり〈継子いじめの物語〉が多数存在していたことがうかがえるのである。

また、「賢木」の巻に紫上と丘部卿の北の方の間柄について次のような記述がある。

西の對の姫君の御さひはひを、世の人も、めできこゆ。少納言なども、人しれず「故尼上の御祈りのしるし」と見たてまつる。父親王も、思ふさまに、きこえかはし給ふ。嫡腹の「かぎりなく」とおぼすは、はかばかしうもえあらぬにねたげなる事多くて、まま母の北の方は、安からずおぼすべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御有様なり。

〈古典文学大系㈡三八〇14～三八一2〉

継母の北の方は、紫上の出世をねたんで〈安からず〉おもっていたというのを、作者・紫式部は〈物語にことさらに作り出でたるやうなる御有様なり〉と評したのである。〈継子いじめ〉〈継子への虐待〉というものを特に作り出すのが昔物語の方法であったと紫式部は考えているのである。「賢木」の巻では、紫上と北の方との継子物語が昔物語の方法と同じようになってしまったと紫式部はつけ加えたのである。しかし、「螢」の巻の作者は昔物語の方法とは異なる継子物語を意図していたのだ。紫式部は、昔物語の〈継子いじめ〉

の方法をどのように受けとり、どのような新しい継子物語の方法を考えたのであろうか。

（※引用文は以下古典文学大系本による）

(二)

紫式部の方法を考察するにあたって、まず昔物語の〈継子いじめ〉の方法がどんなものであったかを考えることにする。

折口信夫氏は「『継子・継母』の話は平安朝の頃から出て来るが、さういふ事実があったからといって小説にはならぬ。事実から小説になるまでには時日を要する。ちゃうど鎌倉時代になって作物の上に継子・継母が現れ始めるのである。」――（折口信夫全集巻十二244～245）と言われるが、「源氏物語」が成立する頃までには、現存する「落窪物語」「宇津保物語・忠こその巻」「住吉物語」（これについては諸説があるが一応堀部正二氏の説に従うことにする）の継子いじめの物語は既に成立していたものと考えられる。これらの昔物語の継子いじめがどのように書かれていたかを「落窪物語」・「住吉物語」で見ることにする。

「落窪物語」について玉上琢弥氏は「①継母の虐待　②貴公子による求婚と救出　③継母への復仇　④実父の孝養　⑤いや栄える一族」という構成をとっており、ハッピー・エンド、めでたしめでたしで結ばれる昔物語通有の一大要素、玉の輿に乗るという「女性の物語」最大の要素を含めて、「継子いじめ」の物語に必要な筋立ては完備していると言えよう。すなわち、作者にとっては、『継子いじめ』の話を書こうとした時、既に結末まで明らかであったのである。」（「物語文学」49ページ）と述べておられる。

また、「住吉物語」については諸説あるが、堀部正二氏は「新資料による住吉物語の一考察」（「中古日本文學の研究」集録）の中で「現存本住吉物語の最も中心的な主題である継子物語といふ點についても、以上の断片的な資料の上には現れてゐないが、臆測するに主計頭の危難といふ事件が、やはり頼るべき実母を喪った孤独の姫君にして遭遇しさうな事であれば、古本も同じ『継母の腹ぎたなき昔物語』の一つであったのではなからうかと想像して差支はあるまい。」と述べておられる。「螢」の巻の〈継母の腹ぎたなきむかし物語もおほかるを〉という記述や「落窪物語」「住吉物語」を通して、昔物語の方法は　継母の腹ぎたなき〉〈継子虐待〉であったと考えることができる。

(三)

では、紫式部の〈継子いじめ〉の物語は、どんなものであっただろうか。「源氏物語」に現われる継父母・継子の関係にある人物を示すと次のようになる。

A　源氏周辺の継子関係

1、藤壺―源氏
2、弘徽殿大后―源氏
3、源氏―紫上
4、源氏―玉鬘
5、源氏―前斎宮・秋好中宮
6、源氏―薫

3の源氏―紫上については、

君（紫）はをとこ君のおはせずなどしてさうざうしき夕暮などばかり

ぞ尼君を恋ひ聞え給ひてうち泣きなどし給へど、宮をば、ことに思ひ出で聞え給はず、もとより、見ならひ聞え給はで、ならひ給へれば、今はただ此の後のおやをいみじう睦びまつはし聞え給ふ。（若紫㈠二三一12～16）

つれづれにて『戀し』と思ふらんかし　と忘るゝをりなけれど、たゞ、女親なき子を置きたらむ心地してみぬ程うしろめたく、「いかゞ思ふらん」とおぼえぬぞ、心やましきわざなりける。（葵㈠三四八4～6）

や、紅葉賀の巻の〈母なき子持たらん心地〉（二七六8～9）によって継親・継子の関係であることがわかる。

また、4の源氏―玉鬘についても

いさゝかも他人とへだてある様にもの給ひなさず、いみじく親めきて「としごろ御ゆくへを知らで、心にかけぬ折なくなげきつるを。かく見たてまつるにつけても、夢の心地して過ぎにしかたの事も取りそへ、忍びがたきにえなむ、きこえらにざりける」とて御目おしのごひ給ふ。まことに悲しくおぼし出でらる、御年のほどかぞへ給ひて　「親子のなかの、かく年経たるたぐひは、あらじものを。契りつらくもありけるかな。今は、物うひうひしく、若び給ふべき御ほどにもあらじを年ごろの物語なども、聞えまほしきに、などかは、おぼつかなくは」とうらみ給ふに、（「玉鬘」㈡三六六9～三六七2）

「むつかし」と思ひて、うつぶし給へるさま、いみじう懐しう手つきのつぶつぶと肥え給へる身なり肌つきの細やかに美しげなるに中〳〵なる物思ひ……いとさかしらなる御親心なりかし。（「故蝶」㈡四一一5～15）

のように〈親めきて・親子・御親心〉等と継親・継子の関係であることを示しているのである。

B　紫上周辺の継子関係

1、兵部卿（式部卿）の北の方――紫上

2、紫上――明石姫君

3、紫上――夕霧

C　空蟬周辺の継子関係

1、空蟬――軒端荻

2、空蟬――紀守（河内守）

D　玉鬘周辺の継子関係

1、玉鬘――真木柱

2、玉鬘――太郎・次郎

3、真木柱――按察大納言（紅梅）――真木柱の宮君

E　夕霧周辺の継子関係

1、花散里――夕霧

2、四君（北の方）――雲井雁

3、落葉宮――六君

4、按察大納言――雲井雁

F　浮舟周辺の継子関係

1、常陸守――浮舟

2、中将の君（浮舟母）――蔵人式部丞

3、中将の君――大君・中君

G　兵部大輔の妻――大輔の命婦（末摘花の巻）

H　蜻蛉式部卿宮の今の北の方――蜻蛉式部卿の宮君

(四)

A～Hの継子の関係にある人物の仲を、さらに①仲の悪かったもの、②仲の良かったもの、③懸想まで入っていたもの、④その他の四つに分類することができる。

①仲の悪かったものとしては、

A・2弘徽殿大后――源氏、A・6源氏――薫、B・1兵部卿（式部卿）の北の方――紫上、F・1常陸守――浮舟、F・2中将の君――式部丞、G兵部大輔の妻――大輔の命婦、H北の方――蜻蛉式部卿の宮姫、

がある。これらはいわゆる昔物語に見られる、あの〈継母の腹ぎたなき〉に相当するものである。特に兵部卿の北の方・蜻蛉式部卿の北の方はその腹ぎたなさにおいては昔物語にひけを取らなかったであろう。源氏が薫の誕生の時にあのまなざしの冷たさも継子いじめの一変型と考えることはできないであろうか。常陸守は、浮舟の結婚相手の左近少将を自分の娘と結婚させるほど浮舟をいじめたのである。

しかし、常陸守にも「浮舟母と浮舟とが自分を、又は自分の子供を疎遠にするからだ」（東屋）と言う言い分があった。また、浮舟が死んだと思った時に常陸守は、

「いと、めでたき御さいはひを捨てゝ亡せ給ひにける人かな。おのれも、との人にて、参り仕うまつれども、近く召し使ふ事もなく、いと、け高くおはする殿なり。若き者どものこと仰せられたるは頼もしき事になん」など、喜ぶを見るにもまして、「おはせましかば」と思ふに、臥しまろびて泣かる。守も今なむ、うちなきける。（「蜻蛉」(五)三〇九9～16）

と悲しむのであった。

兵部卿の北の方も同様に、紫上が源氏に引き取られて行方不明になると、

北の方は、はゝ君を「憎し」思ひ聞え給ひける心も失せて、わが心に任せつべうおぼしけるに違ひぬるは、口惜しう思しけり。（「若紫」(一)二三一8～10）

と残念がるのである。さらに紫上が、父兵部卿からは「紫上が北の方をうとむから、北の方も心をおく」（若紫）と見られている点やGの大輔の命婦が、自分から継母の所へ行かなかったと言っている（末摘花）点は、以前の〈継子いじめ〉〈継子虐待〉とは大変違っているのである。仲が悪かったといっても、それが、単なる昔物語に見られるような〈継母の腹ぎたなき〉という面だけで処理されなかったのである。そこには、その場その場に複雑なものを紫式部は考慮していたのである。

②　仲の良かったものとしては、

B2紫上――明石姫君、C1空蟬――軒端荻D1玉鬘――真木柱
D2玉鬘――太郎次郎　D3真木柱――按察大納言大君　D4按察大納言――真木柱の宮君　E1花散里――夕霧　E2四君――雲井雁　E3落葉宮――六君

がある。これらは、①の仲の悪かったもの〈継母の腹ぎたなき物語〉とは異って、継親継子の仲が良いのである。昔物語では①の〈継母の腹ぎたなきもの〉を〈ことさらに作り出した〉であろうが、現実の社会での継子との関係は、②のように仲の良い場合が多かったのであろうと思われる。紫式部は、そういう現実の姿を昔物語から離

れて強調したのであろう。

ただし、紫式部は、仲が良かったと言って、すましてはいなかった。仲が良かったと言っても所詮継子との関係であるから、内面には複雑なものがある筈である。紫式部はこの点を見のがしはしなかったのである。例えば、「若菜上」で源氏が明石姫君に紫上との関係について、

今はかく、いにしへの事をも、たどり知り給ひぬれば、あなたの御心ばへを、おろかに思しなすな。もとよりさるべきなか、えさらぬ睦びよりも、横さまの人の、なげのあはれをもかけ、一言の心寄せあるは、おぼろげのことにもあらず。まして、こゝになどさぶらひ馴れ給ふを見る〳〵も、初めの心ざし変らず、ふかくねんごろに思ひ聞えたるを。いにしへの世のたとへにも「さこそは、うはべには、はぐゝみげなれ」と、らう〳〵しきたどりあらむも、かしこきやうなれど。猶、あやまりても、我（紫上の）（が）ため、下の心ゆがみたらん人をさも思ひ寄らず、らうなからむためは、ひき返し、あはれに「いかで、かゝるには」と、罪得がましきにも、思ひな（ほ）る事もあるべし。」（㈢二九八6～14）

と継子の道を教えているように、現実における継子との関係の複雑さを充分に考えていたのである。

③、懸想のあるものとしては

A1藤壺――源氏、A3源氏――紫上、A4源氏――玉鬘　A5源氏――六條御息所の娘　B3紫上――夕霧　C2空蟬――紀守

がある。これは先の②より一歩進んだ継子の関係である。ここには、勿論、〈継子いじめ〉の要素が入る余地はありえないのである。

④　その他（関係のわからぬもの）としては、

E4按察大納言北の方――雲井雁　F3中将の君――大君・中君

がある。

(五)

高崎正秀氏は「さう云へば源氏物語などもその主要人物は尽く片親が継子として描写されている」（「禊ぎ」文学の展開――源氏物語の底流として）と指摘されたが、㈢で考察した通り、継子の関係は源氏物語に多数書かれている。それらの中には昔物語のように〈継母の腹ぎたなき〉ものもあるが、しかし、多くのものは、昔物語の〈継子いじめ〉とは違ったものとなっている。〈継子いじめ〉を〈ことさら作り出し〉て書くのが当時、一般に考えられていた物語であったのであろうが、現実には、〈継子いじめ〉はあまりなくむしろ継子と仲良く生活している人々が多かったであろう。（現在もそうだが）そういう現実を紫式部は熟視して、複雑な継子の関係を書いたのである。紫式部の〈継子いじめ〉の方法は、現実離れした、〈ことさらに作り出した〉昔物語をより現実的にする一方法であったのであろう。

参考文献

玉上琢弥氏著　「物語文学」塙書房（昭和35年7月5日）

折口信夫氏著　「折口信夫全集」巻十二　中央公論（昭和41年10月25日）

堀部正二氏著　「新資料による住吉物語の一考察」（「中古日本文学の研究」集録）教育図書刊（昭和18年1月25日）

高崎正秀氏著　「禊ぎ」文学の展開――源氏物語の底流として（「日本文学研究資料叢書」源氏物語Ⅰ有精堂昭和44年10月20日）

（静岡県立清水西高校教諭）